いま（さら）倫理学（なんか）に何ができる（というの）か？
――「下級哲学」の社会的機能をめぐるいくつかの考察

三谷尚澄（信州大学）

「哲学者たち、仕事に戻る――」。そう題された論説が、『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』に掲載されたのは一九七四年のことであった。「価値判断が話者による情動の表出にすぎないのである以上、倫理学や政治哲学に携わる人間は、道徳や政治にまつわる現実的問題に口を差し挟むべきではない」。そういった（二十世紀中盤までの英米哲学を支配していた）情動主義者たちの見解を乗り越え、哲学者たちは、いまや中絶や尊厳死の是非をめぐる厄介な道徳的問題とも正面から取り組むようになったのであり、これら一連の動向には、近年における哲学の展開のうちでも、最も刺激的でもっとも大きな成果を期待することができるのではないか。それが、書き手であるピーター・シンガーの主張であった。

シンガーの論説から五十年。「ELSI」というトピックに対する関心の高まりは、シンガーの予測の正しさを証示しているのかもしれない。あるいは、カントの顰みに倣いつつ、「倫理学はとうとう上級学部のメンバーシップを獲得するに至ったのだ」。そんな言い方をすることが許されるのかもしれない。「国民に対する影響の大きさに鑑みて、大学において公に講じられるのはしかじかの性質の学問でなければならない」。そのような観点から、政府が最も大きな関心を寄せ（かつ、裁可する）話題を論じることに上級学部の使命が見出されるのであれば、さまざまな社会的事象の ELSI を論じる倫理学者たちの言説が、「学術的な関心だけに配慮し」、「自分が適当であると認める通りに学説を展開する」ことを躊躇わない下級学部に帰属しないことは明らかであるように思われるからである。

従来通りの（つまり「下級」の）言説に主たる関心を寄せる倫理学者たちが、以上の事態を手放しで寿いでいられるわけでないのはもちろんである。ローティが指摘している通り、倫理学の社会的有用性をめぐる「文化政治」の観点からみたとき、道徳哲学者たちが、さまざまな社会的事象をめぐって一般の人々よりも優れた道徳判断を下すことができる、などと想定することは許されないのではないか。あるいは、カントやミルの語法に通じているだけの倫理学者が、自らに馴染みのボキャブラリーを上級学部の言説空間にもちこんだところで、場違いな言葉を弄する異端者として「お払い箱」にされるのが関の山ではないのか。

「いや、ローティ先生には失礼ながら、上級学部のメンバーたる倫理学者がそのように素人くさい言説を展開することはないのです。アイソトープの概念に通じた物理化学者の語りと同様に、ELSI をめぐる倫理学者たちの言説は、スマートシティやゲノムの専門的語法に通じた専門家としての資格において展開されるのです」。そのように言われるかもしれないが、このことは、上級学部への昇格を果たし、ELSI の専門家としての資格を獲得した倫理学者たちが、従来型の哲学や倫理学の語法とは縁を切り、出身母体である下級学部の仕事からは足抜けすることを意味するのではないか。

さて、このような状況を前にするとき、従来型のボキャブラリーを保持したままの哲学者や倫理学者たちには、文化政治的に言ってどのような役割を期待することができるのだろうか。あまりにも急激に、かつラディカルに変容する社会的・技術的現実を前にして、「いま（さら）倫理学（なんか）に何ができる（というの）か？」　シンポジウムの当日には、この問題について、できうる限り前向きな回答を与えることを試みてみたい。